猿新聞

編集・発行者
山村　準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp

鳥獣害対策の基本

鳥獣害は、農業者の生産意欲の低下により耕作放棄地が増加し、これがさらなる被害を招くという悪循環が生じており、被害額として数字に現れる以上の悪影響を及ぼしています。

最近、お年寄りから「昔はシカなどの農作物被害が少なかったのに、最近になって被害が多くなった。」という話を耳にすることが多くなりました。

なぜでしょうか?。

被害を減らすためには、その理由を理解することが重要になります。

大まかな理由は、高度経済成長期以降、拡大造林事業等による森林の変化。山間地域の過疎化高齢化による人圧の低下。（無防備な田畑や隠れ場所となる耕作放棄地の拡大）。気象の変化。（地球温暖化等による死亡率の低下による生息域拡大と個体密度の増加）。等に起因していると考えられています。

集落周辺の環境はどうなっていますか?。

鳥獣害対策というと、真っ先に柵で囲うことを考えがちですが、被害防止策は、野生鳥獣に集落をエサ場と認識させないということが基本になります。

近頃、矢川周辺では山際や宇陀川沿いから人慣れしたイノシシやシカの集落内への進入が多く、被害が甚大化しています。

それは、彼らが矢川周辺を「良い餌場」と認識するようになったからだと思います。やがて周辺の草むらになった休耕地や集落の藪を安全な場所と認識し、集落で繁殖するようになりかねません。

集落周辺の耕作地には栄養価の豊富な餌が存在するため、それらを食べることで体力を消耗することなく越冬することができ、初産年齢の低下や幼獣の死亡率や死産率の低下を進行させます。

結果として集落に出没する野生獣を増加させることになります。

今後は、獣害対策を原点から見つめなおし、人と野生獣が共生できるような取り組みが必要です。

対策に対する意識の温度差は大きいですが、共通の問題点の上にたってどうすべきかの議論を行い、みんなで出来る獣害対策を立案し実践していかなければなりません。

集落周辺の野生鳥獣の餌を減少させましょう。

「盗ってもいいよ。」といっているような無防備な畑が周辺には多く点在し、このままでは獣害の勢いを食い止めることが困難な状態です。無防備な畑を減らすことが、獣害を減らしていくことに繋がります。

畑作物のキャベツ、ハクサイ、レタス等結球野菜のほとんどは、結球部のみを収穫し、外葉は放置しますが、外葉や収穫後に発生するワキ芽が冬期の野生鳥獣の餌となります。収穫残渣は、速やかに圃場にすき込む等の対策を行い、集落の「餌場としての価値」を下げるように環境改善することが重要です。

水田の管理についても同じことがいえます。

水稲品種の早生化によって、稲刈り後に耕起せず放置した場合、切り株から「ひこばえ」が生育し、遅れ穂が登熟します。これらが冬期の、野生獣の大量の餌となります。

稲刈り後も継続的に柵を設置するか、速やかに耕耘するようにしましょう。

広域的な集落防護柵を設置すると、柵の保守にも苦労しますが、柵内部に害獣が住み着いている可能性があり害獣を駆除する必要もあります。

獣害対策は長期戦です。集落を獣害がなかった20～30年前の環境に戻すには、長期戦は否めません。

高齢化が進む中、肉体的、経済的に無理はせず、また、無理を強いることのないよう、各人ができる範囲で助け合いながら、昔のような野生動物と共生できる環境を取り戻さなければなりません。

全国的にみて、地域住民に対して行政の啓蒙、啓発など獣害に対する意識づけ対策の多くは、パソコンなどのホームページが主になっていて、パソコンの持たない人や老人には届きません。

地域行政の広報誌などを活用し、啓発活動を推進すべきだと思います。

行政の反省を促します。

里ザルとのつきあい方

左表は、サルの人慣れ度合いを表しています。

名張A・B群は全て4・5ランクまで人慣れが進んでいます。

ここまでエスカレートすると防除は非常に困難になります。

最近、里で産まれたサル達は、山での暮らしの経験はなく里で暮らすのが普通だと思っています。

また、親ザルは、子ザルに里での生活の仕方を教え、里ザルになりきっています。

自然界で木の実など自然のものを食べているサルは、およそ3年に1度10年で3頭ほどのペースで出産しますが、三重県大山田村の畑を荒らす群れでは10年で7頭ほど増えているという報告もあります。

サル被害は軽微なものも含めればずいぶん昔からありましたが、それは一部地域の山間部に限定されていました。それが地域差はあるものの80年代後半から90年代にかけて中山間地域に広がり急増しています。

近頃、山奥でサルを見かけることが少なくなったという声も一部の地域にあり、人里側へと分布が広がりつつあります。

山で生活していたサルがなぜ里に定着するようになったのでしょうか。

サルたちが里に現れるようになったおもな原因には、過疎化や高齢化などの人間社会の変化、開発や拡大造林などによる生息環境の悪化、サルの分布や個体数の変化、などが指摘されています。

被害状況がますます深刻化するなか、里ザルとどのように付き合えばいいのかが、いま求められている課題だと思います。

人が「サル慣れ」して、無防備になってしまうことが、最も心配されます。

サルは食べることには命がけ。必死です。

これに対抗するにはこちらも必死にならなければなりません。「自分の畑は自分で守る」という気概が、サル撃退の大きな原動力になります。

今後は、20年後、50年後を見据えた、人とサルとが昔のように、共存できる環境を整えていかなければなりません。

因みに、サルは有害による捕獲は認められていますが、狩猟獣ではありません。

サルの人なれ度合い　レベル５

1　人の姿を見ると、遠くにいてもすぐ逃げる。
2　人が遠くにいると逃げないが近づくと逃げる。
3　人が近くにいても多くのサルが逃げない。
4　人が追い払ってもなかなか逃げず、時には威嚇してくる。
5　民家に侵入することがある。

鳥獣害を招いた？ 農業の機械化

昔は、天気さえ良ければ毎日畑に出て仕事をしていました。野菜の世話もさることながら、そこに毎日いることが野生鳥獣に人間の存在感をアピールしていたのです。

ところが、現代では、農業の近代化に伴い機械化が進み、人が畑に立つ時間が殆どなくなり、田畑は無人状態です。田畑に人影なくなったことが、鳥獣害が増える原因のひとつになっているように感じられます。田畑の無人化は、野生動物に田畑を明け渡してしまっているようなものです。

先人のように、「自分の畑は自分で守る」という気概をもって、田畑に出るようにしましょう。

また、機械化による収獲ロスも、鳥獣害を招く大きな要因に繋がっています。コンバインなどではマニュアル通りの機械操作を心がけて下さい。収獲ロスは少なくなると思います。

サル出没状況

指南員報告

2月の動向

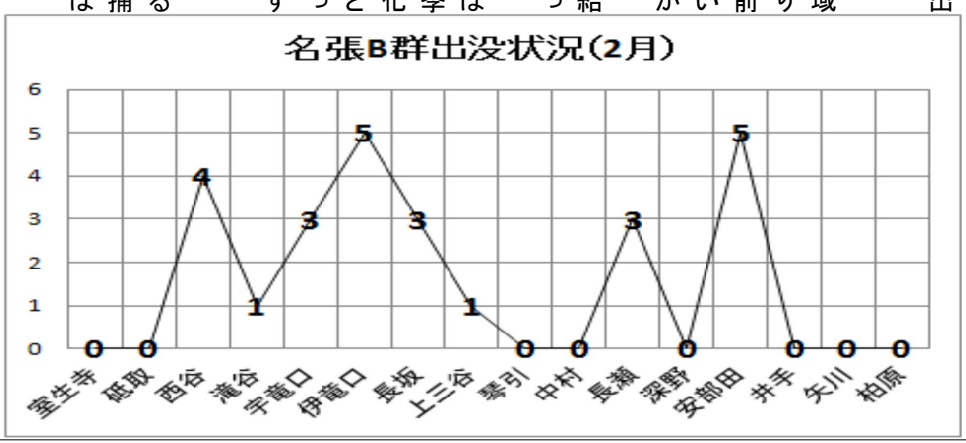
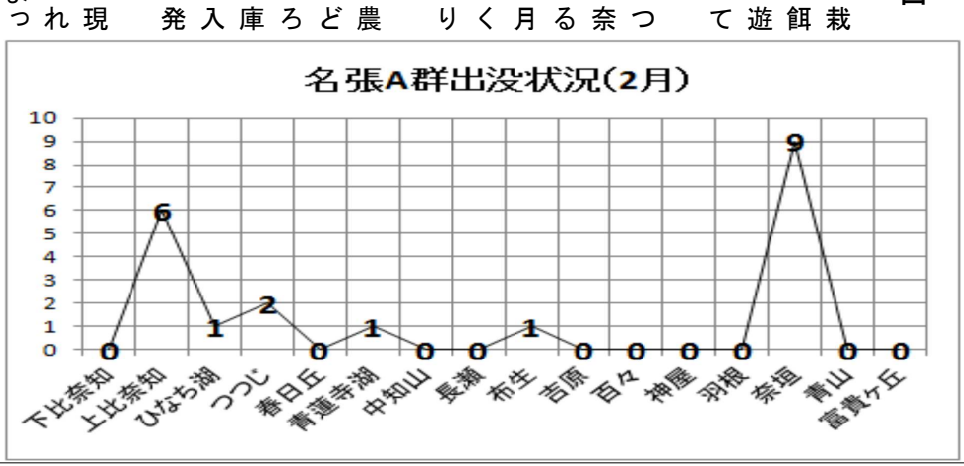
AB両群共、栽培作物等の食餌資源を求めて遊動を繰り返しています。

特にA群については、上比奈知地区で留まる事が多く、今月は、2週間近くをそこに留まりました。

又、両群共農作物被害にとどまらず、ところどころで、倉庫や家屋内へ侵入しての被害も発生しています。

地域での出現度合いは、それぞれの環境によって大きく違いが出ています。

B群では遊動域が広がりつつあります。5～6年前では、宇陀川沿いの「谷出」付近が東限であったのが、近頃では井手、結馬周辺まで広がってきています。

遊動域は通常は固定的ですが、季節的な環境の変化や、周りの群れとの関係の変化によって遊動域が変化することがあります。

★家屋に侵入するサルは特定して捕獲を考えなければなりません。